

2002.12.10 現在

毎日新聞社大阪局紙面研究プロジェクト 2

山下満智子

平成14年1月から1年、毎日新聞社大阪局の紙面研究プロジェクト委員を引き受けることになった。研究会は、毎日新聞社大阪局の社内組織であり各デスクが参加して毎週開催されてきた。平成11年から、「開かれた新聞」を目指して、月一度読者の代表として外部から5名の委員¹が参加している。

12月担当分について、骨子を報告する。研究会は、筆者から、主に10月-12月始めの新聞記事から以下の問題について、今後の活動への期待と細かい点で気になったことをあらかじめ送付し、担当デスクから回答を得るという形で進められた。他に紙面研究会モニター2名も参加された。

項目

- 拉致事件、帰国から一ヶ月 2件
 - 11月19日 パソコン研修など
 - 11月15日～ 空白の四半世紀、11月26日検証 北朝鮮報道40年など
- 田中さん報道 2件
 - 10月10日 朝刊 31面 出世レースは出遅れ？
 - 10月？日 島津製作所ノーベル賞効果
- ゴーカート運転女性窒息死事件について
 - 11月(13日の事件後)デスクです。
 - 11月24日 29面 アサッテ君
- 12月7日 1面 道路民営化委員会 最終報告 写真説明
- 12月10日 11面 連載サラリーマンと呼ばないで

1. 拉致事件 10月15日に5人の被害者の方が帰国して1ヶ月たった頃からの一連の報道を通して、2つのことを感じた。

1) 読者が関心を払いながらも、そっと見守ることのできる報道はあり得るのか。

帰国された5人の方の報道には、当初単純に「良かった。」と思って接した。しかし現在は違う。同じように5人の方の記事に目を通しながら、そっとしておいてあげられないも

¹ 他の委員は、神戸女学院大学教授 生野照子氏、関西大学教授 井上宏氏、「関西文学」編集長河内厚郎氏、ノンフィクション作家 佐山和夫氏。それぞれ年2回を担当。

のかと思う。

朝刊の2面の隅に毎日掲載される「首相日々」については、「政治家がどこで誰に会っていたか」を知ることは、国民の知る権利でもあり義務でもあると思う。

しかし帰国された5人の方については違う。たとえ平安に過ごされていることの報道にしてもテレビで、新聞で、週刊誌で、かれこれ一ヶ月以上たつのに日常の行動を毎日写真つきで知るの、異常ではないか。

多様な読者の関心に、答えるのが新聞の使命であるから、読者の関心がプライバシー侵害を助長している面もいめない。

今後家族の方の帰国などには、冷静な対応が必要とされる。また子供を含むご家族の生活には、これから長い時間がかかるだろう。関心は持ちながら温かくそっと見守る、プライバシーを尊重するという国民の節度や環境作りも毎日新聞読者として期待する。

2) 一方で帰国一ヶ月たったところから、見られる多様な意見、検証作業記事を高く評価したい。

11月21日	27面	ニュースそうだったのか メディアスクラム防げたが・・・異例の間接・代表取材
11月15日～連載		空白の四半世紀
11月26日		検証・北朝鮮報道40年
11月27日	4面	記者の目
11月28日		日朝交渉検証
12月1日	3面	時代の風 拉致問題への対応を問う 高木のぶ子氏
12月3日		岸井成格のテレビメール
12月3日		朝鮮学校を知っていますか
12月4日		みんなの広場 2件

これらの記事を読むと、これほど情報の多い社会なのに、自分が関心を持たなかったために知らないで済ませていることの多さに驚く。これらの多様であるがゆえに偏らない記事が、まさに「そうだったのか」と冷静な「自分の判断」を育てる。その意味では、成熟した読者を育てる報道の試みでもあろう。

また「検証 北朝鮮報道40年」では、各新聞社の報道を同時に取り上げていることも、読者には親切だ。大変な作業であったと思う。スクラップしておきたい記事であった。

2. 田中さんノーベル賞報道

12月10日の授賞式で田中さんへの関心がピークに達するだろう。今年はほとんど好いニュースが無かったので、多くの国民が、田中さんの人柄に癒されたと言う背景があるにしても、ストックホルムで、日本の取材の過熱が奇異に見られているというのは、恥ずか

しい。

先の拉致被害者 5 人の方へと同じように、温かくプライバシーを尊重して見守りたいと思うのは、多くの読者の気持ちだと思う。しかし知りたい、見たいという読者の希望が、田中さんに関しても知らず知らずにマスコミ関係者が取材においてプライバシーを侵す行為を助長している。

読者の多くは、新聞とテレビ、週刊誌などを併用してニュースを知るせいもあるが、特に取材が過熱してきた場合、新聞には、テレビや週刊誌とは違う節度ある報道を期待する。

一方で新聞がかなり節度ある抑制された記事を掲載しているにも関わらず、読者のほうが、テレビ、週刊誌、つり広告等との接触機会の果てに、新聞の記事に対して、「また掲載された」という印象を持ってしまうという面ももちろんある。

さて、田中さん関係で 2 点

1) 10 月 10 日 木 朝刊 31 面 ノーベル化学賞 出世レースは出遅れ？

出世レースの出遅れとノーベル賞という権威のミスマッチ、何回もノミネートされて事前に準備された小柴教授に対して田中さんの情報がまったくなくて、苦労した結果とも思うが、唐突な見出しだ。「なんで、ノーベル賞取ってこんなこと言われなあかんの」というのが、正直な気持ちであった。

後日、詳細な記事が何回も掲載されて、出世レースの件は、田中さんが実験を続けたいためとのことが、みな了解するところとなったのではあるが、しかし最初の記事の印象が拭われたわけではない。

2) 津製作所 ウハウハ 田中さんノーベル賞効果 3 億円

同じく見出し、表現力は抜群でしたが、ちょっと品がないかなと感じた。全国版でしようか。

3. ゴーカート運転 26 歳女性窒息死事件後の取り扱い

11 月 ? 日 デスクです。上記の事件について、

・命を落とすとファッションどころではありません。

11 月 24 日 29 面 アサッテ君

「デスクです」のファンである。あるときは読者と同じ視線で新聞を見てのコメント、あるときはデスクとしての悩みに共感を覚える。しかし今回の「デスクです」は、少々配慮が足りないのではないか。

昨年か一昨年から、以前も流行の上げ底ブーツが原因で亡くなった女性のことが記事になった。上げ底ブーツでは、階段から落ちて骨折なども頻繁にあったが、流行は、事故によってすたれたわけではない。

「・・・命を落とすと、ファッションどころではない。」というのは、13日の記事を見た大人、特に男性のだれもが持った感想だと思う。しかし流行のマフラーをやめた女性は何人いるだろうか。今回の「デスクです」は、多くの読者の感想を代弁しているが、亡くなった女性や親族には、少し辛い。この件では、同じ事件を扱ったであろう漫画のアサッテ君の表現に軍配をあげたい。

4. 12月7日 1面 道路民営化委 最終報告

写真下 説明 京都(向日市)版 笑顔で握手する松田、大宅委員とあるが、どう見ても大宅委員の顔は笑っているように見えない。引きつっているというほうが近い。「笑って握手」した瞬間を捉え損ねたのか。

記事内容からしても、「笑って握手」したのであれば、かなり委員に対する印象は変わる。詳細を読まない読者には、写真とその説明が、情報の全てとなることも多い。またそういう読者は多いだろう。「笑顔で握手」が事実でないとしたら記事だけでなく最終報告の認識に影響を与え兼ねないのではないか。

同じく 最終大阪版では、笑顔でが削除されている。なぜか。

5. サラリーマンと呼ばないで 連載

11月14日 13面

11月22日 8面

12月10日 11面

タイムリーな連載で、興味深く読んでいる。また読者の反応も凄いとのことだ。誰もが人ごととは思えないからだろう。

ところで3人のサラリーマンの連載を読んで、まだ女性は、サラリーマンではないのだなと思って見ていた。10日に総合職の女性を取り上げられた。男性の取材対象は、多様な年代、キャリアであったが、続くサラリーマン女性は、(まだ続くのかもしれないが)いつものように均等法以降の世代だった。40-60歳のサラリーマン女性にも、この時代それぞれのドラマがあるはずと思うが、「サラリーマン」としては、いつもその存在が忘れられるように思う。いかがであろうか。